

近現代における ギリシャとトルコとの住民交換

川島 陽子

(1) 問題提起

オスマン＝トルコ帝国時代、即ちビザンチン帝国が滅亡した 1453 年以来、キリスト教のギリシャはイスラーム教のオスマン＝トルコ帝国下でも、自らの信仰生活を保持してきた。近年になり帝国が斜陽化していく中で、少数民族に反感を抱く青年トルコ人達がロシア等で秘密結社を結成し、水面下で活動していた。エンゲル・パシャを代表とする「青年トルコ党」で、その一員であったケマル・パシャは、第 1 次世界大戦後のセープル条約に不満を抱き、純粋主義の故にギリシャ人等少数民族の壊滅を実施した。即ち 1922 年 8 月 26 日に発生したギリシャ人等大虐殺事件である。その後、日本も含めた欧米各国による外交レベルでの協議が実施され、1923 年 7 月にローザンヌ条約として、小アジアと西スレースを領土とする条件で調印した時オスマン＝トルコ帝国は崩壊し、トルコ共和国が誕生した。

その様な結果を招いたローザンヌ平和会議で浮上した住民交換案は、当時としては史上最大規模の人数であり、人口 500 万人 (当時) のギリシャ本土へ 100 万人の難民が帰国するという内容であった。その為、日常生活のあり方までが政府レベルで検討された。それは帰国直後の食糧配給は無論のこと、都市難民には職業を、農業難民には農地を、国家が与えるというものであった。因みにギリシャ本土からトルコ領土に帰国したトルコ難民はその半分の 50 万人と見込まれていた。

ここではギリシャ難民の問題のうち、次の 2 点を検討したい。第 1 は規模な住民交換がどの様に現代国際社会へと影響してきたか、第 2 はギリシャ本土に帰国した難民の状況はどの様であったか、特に都市難民の場合をとりあげ、その手法として 1) 体験談を比較・分析していく方法、2) 両親が都市難民であ

ったギリシャ人女性へのオーラル・ヒストリーを試みて考察していく。

(2) 住民交換への経緯とその後

1800年代になりペロポネソス半島に秘密結社が散在し、1821年3月に「大イデア」精神を掲げて独立を宣言し、戦後実際に独立が認められたのは複数の説があったが、今日では1829年とされている。1833年2月に臨時首都ナフプリオンでババリアより17歳の王子オットーを国王に迎え、王制による国家が事実上存在することとなった。血縁を最も重視する日本の天皇制と異なり、ギリシャの場合国王の交替は外国から招聘する事が多かった。また、デンマーク出身の国王ゲオルグⅠ世の孫フィリップは、現在のイギリス女王エリザベスⅡ世と結婚した。

因みに2005年現在のギリシャ共和国は元首を大統領とし、人口約1000万人、通貨は古代以来のドラクマを廃止し2002年1月1日よりユーロを採用した。言語は現代ギリシャ語の中でもディモティキと呼ばれる民衆語である。

さて、独立戦争中に小アジアのスマルナ（現イズミール）に近いヒオス島で、1822年にオスマン＝トルコ軍によるギリシャ人大虐殺事件が発生した。ドラクロワが絵画にした事から国際的に知られる様になった。その正に100年後の1922年に貿易都市スマルナに於いて、オスマン＝トルコ軍によるギリシャ人等少数民族に対する大虐殺事件が発生した。その軍を率いたのは、秘密結社「青年トルコ党」の一員で職業軍人のケマル・パシャだった。ギリシャ軍はスマルナに上陸していたものの、僅か14日間で陥落した。敗北の原因として、当時のバルカン半島内各地で発生した戦争、特に2度に亘るバルカン戦争により、兵士達が疲労困憊状態にあり完敗したとされているが、確かな研究上の理由は未解明である。

このスマルナ事件の背景として、オスマン＝トルコ国内での近代化や民主化への動きが挙げられる。決定的とされる理由は、1914年に開始した第1次世界大戦でドイツ側に属していたオスマン＝トルコ帝国が大敗した事により、勝利した連合軍側に属していたギリシャに有利なセープル条約が大きく起因している。これは小アジアの大部分をギリシャ領とする内容で、オスマン＝トルコ帝国としては黒海に面する僅かな地域が残される程度だった。その為セープル条約は批准されず、更にギリシャ人等の大虐殺事件へと発展した。

1922年8月26日に事件が発生し翌月9月8日にギリシャ軍が完敗した事で、

大量の難民が発生した。それは、逃避か殺害かという瞬間的判断を要するもので、スミルナ港沿岸には追い詰められた難民が小型ボートに我先に乗り込み、乗り切れない者がボートの手摺にしがみつくと、熱湯を浴びせて海に振り落としたとも口述や文献でつたえられている。外国船も難民救助に協力した。スミルナ港沿岸の建物一帯は放火により焼け落ちた。

この事件をうけて、急遽主要各国代表がローザンヌに於いて連日会議を行い、その議題の一つが難民問題でこの小委員会には日本も参加していたが日本の全国紙には関東大震災にもかかわらず、石油問題については連日トップ・ニュースで報道されたが、この難民問題については全く公表されなかった。その会議の標的とされていたのが、現イラク領のモスル油田（当時イギリス支配）で採取される良質の石油であった。既にパイプ・ラインが発達しており、日本船は黒海に至るパイプ・ラインを利用してたと推察され、その為にはアジアのアナトリア半島とヨーロッパの西スレーズとの間の2ヶ所の海峡を通過する問題があった。石油について最も懸念していた日本の立場から見ても、難民問題の小委員会にも参列した事情は明白にされていない。当時のギリシャと日本とは、海運業の関係で親密な交流がなされていた為とも考えられる。会議の公用語がフランス語であった為、会議での発言が全く不可能だった事が、日本の新聞に掲載された（朝日新聞）。

ローザンヌ平和会議が召集されて間もない頃、連合各国とギリシャ及びオスマン＝トルコ帝国が参加した会議の場で、ギリシャのヴェニゼロスが住民交換に対する演説をした記録が外務省外交史料館で保存・公開されている。住民交換という発案自体は独創的ではなく、古代から世界各地で行われてきた。しかし、研究者により大差があるものの、この時の住民交換の規模は、小アジアに住むギリシャ正教徒 100 万人と、ギリシャ本土に住むムスリム 50 万人とみられ史上最大の事態であった。当時ギリシャ本土の人口は 500 万人であり、そこに小アジアで生まれ育ったギリシャ難民が 100 万人も移住するという事から、受け入れ側であるギリシャ本土の対応も大問題となった。

スミルナ事件が発生するまで、小アジアに住んでいたギリシャ人とトルコ人の庶民として人間関係は良好であった。しかし、当該事件により急激に人間関係が崩壊した。ギリシャ正教とイスラーム教との区別という意識に変化し、前者の信者は生まれて以来、渡航した事もない母国ギリシャへ強制移住させられ、同時に後者の信者でギリシャ領に住んでいたトルコ人も、母国トルコへ強制移住させられる事となった。

この政策に対する批判は、その後の両国間に大きく影響する事になるが、ギリシャとしては経済上の観点では成功であったとみなされている。というのも、ギリシャ人は総じて手先が器用な為、農業等綿密な作業に適性があり、その後のギリシャ経済に大きく貢献する事になったからである。特にタバコやオリーブの栽培に優れていた。

さて、ヴェネゼロスはこの様な事態を予測した上で住民交換を受け入れたと推察できるが、ギリシャ民族は感傷に影響される国民性がありそれも配慮するべきであろう。難民になるまでの逃避行や住み慣れた美しい土地・小アジアへの回想が、感情豊かに体験談の中に多く見られる。民族自決意識の強さの表出であろうが、とは言え、日本の戦時中の全体主義的感情とは異なる。ギリシャ人のこうした連帯感とは住民交換が1923年7月にローザンヌ条約の一部として調印された時点で急激に膨張する事になる。この調印をもって前述の通りオスマン＝トルコ帝国は崩壊し「トルコ共和国」となり、その初代大統領にケマル・パシャが就任した。ギリシャ人は彼に反感を抱いているが、反面トルコ人は彼を英雄視し、「アタチュルク（父なるトルコ人）」と称している。ノーベル平和賞候補者とされ、受賞は逃したものの、トルコの民主化、宗教の自由、トルコ帽の廃止、トルコ文字の英文字化等、多くの業績を遺している。不規則な激務の為短命であった（1881-1938）。

ローザンヌ平和会議の際には、ケマル・パシャの流暢なフランス語による発言も多く、不本意ながらもヴェネゼロスとの合意で条約が完成したと言っよう。

難民が移住した後、両国の各残留財産は1930年代になり協定が結ばれたが、実際にはその内容とは異なり返還されなかったという。

今回の難民問題はギリシャ人とトルコ人に限定されていたのではなく、小アジアに居住していた全ての少数民族がその対象となっていた。本稿ではそれらの中でも人数の上で最も多かったともされるギリシャ人を対象とする。しかし、その中でも黒海沿岸のポンドス難民は、エーゲ海側難民とは事情が異なる為対象外とする。というのはポンドス地域はその背後に険しい山脈があり外部との交流がなかった為、古代ギリシャ時代の言語や文化が温存されていた。それが国際的に注目されてから多方面に亘り研究されたが、ポンドス難民の場合、異文化としての母国ギリシャに容易に定住出来ない問題があった。¹⁾

(3) 政治への影響

1 ヴェネゼロス (Ελευθέριος Βενιζέλος, 1864-1936) ²⁾

クレタ島出身という事で有名なギリシャ首相の一人だが、1914年に第1次世界大戦が開始されるまでは、オスマン＝トルコ帝国崩壊後のトルコ共和国大統領となるムスタファ・ケマル・パシャ(アタチュルク)とは友好関係にあった。第1次世界大戦にはギリシャは連合国側に属し、反面ドイツ側に属したオスマン＝トルコ帝国を敗北に追い込み、1920年7月28日～8月10日までパリで討議されたセーブル条約に調印した。しかし、旧ソビエト連邦の援助を受けながら、ケマル・パシャはセーブル条約を批准せず、1922年にスミルナを中心とする大虐殺事件へと発展しその為小アジアと西スレスに住民ギリシャ人150万人³⁾を母国ギリシャへ移住させる事にした。この1923年7月に調印したローザンヌ条約により、ギリシャとトルコとの関係も正常化に向かいつつあったが、国民感情は今日でも対立している。従ってアメリカ合衆国等第3国による状況の観察が尚も必要となっている。大虐殺事件後亡命しローザンヌ平和会議ではギリシャ代表として重大な発言をし、1924年に帰国した。

ギリシャ国民の間では昨今ヴェネゼロス首相が評価される様になった。2004年8月のアテネ・オリンピック及びパラリンピックにあわせて新設された空港を「ヴェネゼロス空港」と命名した点からも、現在ではギリシャ最大の政治家として再認識されている。

2 第2次世界大戦直後のギリシャ共産党

住民交換が実施され難民定住対策の一つとして設立されたアテネ市南方のネア・スミルニ地区では、第2次世界大戦からギリシャ共産党の一派であるKKKの温床の場となった。本来アルバニアからの復員兵により、レジスタンス活動が行われていく内に政党として発展したものである。メタクサス独裁政治を支持し、反面ダンス・ホール、銀行、また様々な風俗業を運営していた。1941年にはEAMが創立され、ネア・スミルニ地区では2,000人の政治犯の釈放運動が展開した。1942年にはEΛΑΣが創設され、ネア・スミルニ地区にも拡張させ、1944年には公然と参戦した。⁴⁾

KKKは戦後も解体される事無く、一政党として存在している。この様に、第2次世界大戦直後に政権を握っていたのは共産党であり、数多くの派閥に分かれて複雑な関係にあった。カラマンリスが亡命先から帰国し文民政権を発足

した頃から反米運動が盛んに行われ、尚も共産党支持が強かった。

作曲家ミクス・テオドラキスの平和を希求する音楽が公然とラジオから放送されるようになった。彼はデモの最中に警察官から銃で後頭部を強打され、脳神経の損傷の為片目を失明し、その後の平和活動により逮捕され、裁判で死刑判決を受けたが、アムネ스티・インターナショナルの「良心の囚人」に認定され、元首恩赦という形で釈放された。内戦中から既に存在していたパバンドレウ父子が率いる ΠΑΣΟΚ で平和活動をしていたが、後に共産党に入党した。

ギリシャ社会党 ΠΑΣΟΚ はカラマンリス首相による文民政権の後に国民から強く支持された政党であった。前述のミクス・テオドラキスや女優メリナ・メルクーリ等国外でも著名な人物が選挙戦で当選した。総体的には安定した民主主義政権であったが、国民の支持を徐々に失い自然解体した。

3 トルーマン・ドクトリン

第2次世界大戦後、トルコの安全性、またイラクの油田が、アメリカ合衆国にとっては旧ソビエト共産主義に対して脅威となっていた。イラン、トルコおよびギリシャは旧ソビエト連邦と隣接している事から、最も共産主義化しやすいという地理上の理由があった。またギリシャ国内では共産党の一派 EAM(ギリシャ国民開放戦線) と、亡命先から帰国した国王の二派に分かれていたが、やがて EAM が主勢力となった。とはいえ、アメリカ合衆国はギリシャが共産主義国になり旧ソビエト連邦に追従する事になれば、トルコが共産圏に入る可能性が強いと見た。そこで「トルーマン・ドクトリン」が発せられた。それは「どこに侵略があっても、直接、間接を問わず、平和脅威を受ける場合には、アメリカ合衆国の国防にかかわるものとみなす」という宣言である。⁵⁾しかし、国内が安定してくると反米運動へと逆転した。その背後には共産党 KKE 等の団結があった。

4 マーシャル・プラン

トルーマン・ドクトリンが軍事援助であり、相前後して提案されたのがマーシャル・プラン。これは経済的援助である。共産主義化への防止を図る対策であり、旧ソビエト連邦を意識した計画である。これは国や地域を限定せず、ヨーロッパ全土を対象としていた。旧ソビエト連邦の反応もあったが、それによ

りアメリカ合衆国と交友関係を持つ事は期待されなかった。復興計画の会議にはギリシャとトルコも参加した。⁶⁾ 合計 170 億ドルの経済支援の下に、ヨーロッパ各国が共産主義化するのを阻止するのが目的であった。

5 NATO (北大西洋条約機構)

1949 年トルーマン大統領が臨席のうえで、12 カ国が調印した。その第 5 条に「締約国は、ヨーロッパ又は北アメリカにおける一又は二以上の締約国に対する武力攻撃が行われたときは、各締約国が国際連合憲章第 51 条の規定によって認められている個別的又は集団的自衛権を行使して、北大西洋地域の安全を回復し及び維持するためにその必要と認める行動（兵力の使用を含む）を個別的に及び他の締約国と共同して直ちに執ることにより、その攻撃を受けた締約国を援助することに同意する」⁷⁾ とされている。元来ギリシャとトルコを参加させようという了解の内にあり、1952 年には両国の加盟が実現した。

1998 年における旧ユーゴ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの空爆では「平和維持における同盟の作戦役割」とされ、「欧・大西洋地域」と称して合法化した。⁸⁾ これはクリントン大統領政権下で行われたもので、空爆後クリントンはバルカン諸国及びギリシャとトルコを訪問した。特にトルコには異例に長く 5 日間滞在した。⁹⁾ それはギリシャとトルコとの関係が欧米諸国の政権に大きな影響を与える、特に石油に対する懸念のあらわれとも言える。

以上の通り、ギリシャとトルコとの民族闘争が欧米において決定的とも言える役割を今日でも担っている。トルコをヨーロッパとみなすか否かは、その時点での解釈にもよるが、アナトリア半島がアジアに含まれるかどうかというのは、今日でも断言出来ない。ただ、NATO が関係せざるを得ない状況になると、例外的表現を用いて NATO の守備範囲としている。

ギリシャとトルコとの平和維持の上でのバランスはその様な拡大解釈で保たれている。両国に NATO が介入する事により、今日の世界の安全がより深く関与してくると言えよう。

(4) 富裕難民と貧困難民

1 富裕難民

ここでは難民の内でも経済力の差がどの様に逃避行に違いがあったかを見て

いく。難民で富裕な者はごく一部に過ぎなかった。彼等はオリエント・エクスプレスに乗車したが、押し寄せる貧困難民の群集でその運行は困難であった。この様な状況は、当時特派員として初仕事をしていたアーネスト・ヘミングウェイが無題として書いている。

スミルナ市で生まれ育ち後に国際的に著名になった実業家オナシスは、タバコ商人を父とする経済的に豊かな難民だった。多くの難民が着の身着のまま逃避する中で、彼は知り合いのトルコ人に金銭を渡しては安全な場所へと移り、アテネ市北方のキフィシアにいる親類へと逃れた。しかし、そこで満足しなかった彼は200ドルだけ持ちアルゼンチンに渡航した。昼夜を問わず働き、貿易で成功し大実業家への道を歩む事になる。ニュー・ヨークで結婚式を挙げた時の司祭は同じ難民の一人でもあった。ニュー・ヨークにはこうした難民が身を寄せ合い、今日も郊外にギリシャ人の溜まり場がある。

Clogg は2枚の結婚式の写真を取り上げている。1枚は1905年のブルジョワのエレニ・ザリフィとステファノス・エヴゲニディスの披露宴の集合写真である。1900年代初頭にパリを中心に流行した華麗な衣装を着た人々の姿は当時流行したファッション・プレートそのものである。¹⁰⁾ その16年後、ソルト・レイク・シティで行われたアンナ・マルセラスとニコラス・ムコンディスの結婚式に上述の夫妻が参列している。¹¹⁾ 衣装も会場も参列者の容貌ですら富裕とは言い難いが、当時としては結婚式を挙げる事すら贅沢であったと宮岡スーラ氏は批判する。1921年には故国ではトルコ人との衝突が明白になりつつあった頃で、ギリシャ人の外国移住が増加し、フロリダでは「ニュー・スミルナ」という町が出来るほどであった。因みにアメリカ合衆国に限らず、オーストラリア等各国に移住し、比較的最近まではドイツのガストアルバイターが有名である。¹²⁾ 全体的にClogg は一部の顕著な場合だけを扱っている。従って、大部分を占める一般人について知るには適切とは言えない。

2 貧困難民

Clogg が富裕難民を扱っている反面、Eddy は貧困難民を扱っている。¹³⁾ Eddy が著した「Greek and the Greek Refugees, 1931」では難民の内のほとんどが貧困難民である。政府が執るべき最も重要な課題は、当然の事ながら食糧と医療及びそれに続く家屋の建設であった。難民対策という政府の課題がこの著書の唯一のテーマである。本稿も「都市難民」と「農業難民」という分類をこの

著書より得た。しかし、統計上の数については詳細だが、実生活上の実情については乏しい。政策の是非という点には全く触れず、単に数の上での報告を中心に据えている。どの文献カタログにもほとんどの場合掲載されているのは、どの政党にも関与していない為と考えられる。

この時代の貧困難民と共産党の関係は必須の課題であるが、Eddy は触れておらず、反面 Clogg は扱っている。それは歴史関係の書物で中立の立場を維持する上での必要であり、その様な観点から見ると、Eddy は政府関係者であったとも考え得る。さもなければ詳細なデータを得る事は極めて困難なはずである。

高額なオリエント・エクスプレス等の列車や金銭を支払ってまで人間関係を頼って逃避した富裕難民に対して、貧困難民は船か徒歩であった。船と言っても多くは小型ボートであり、定員超過でも乗った。また運が良い場合には外国船に救助を求める事が出来たが、目的地不明の逃避行であった。スミルナ港の岸壁まで追い詰められた難民が小型ボートに満載の状態を逃避しようとする写真は有名である。アメリカ合衆国の国旗が手前に写っている事から、報道関係者が船上から撮影したのであろう。著作権の期限切れの為撮影者不明のまま多くの書籍や雑誌に掲載されている。

徒歩による避難は、地理の上で当然の事ながらテサロニケ周辺を目的地としていた事が考えられる。アーネスト・ヘミングウェイは、僅かな荷物を荷車に乗せて行く宛もなく雨の中を、嫁入り前の娘の嫁資をトルコに残したまま途方に暮れている姿を描写している。¹⁴⁾

(5) 都市難民と農業難民

1 都市難民

Eddy によるとアテネの人口は1920年では292,991人であったが1928年には459,211人と急増し、内129,380人が難民であった。¹⁵⁾ アテネ市内への難民の流入は当時の駐ギリシャ大使川島信太郎が目撃しただけでも非常な事態であり、啓明会講演で発表した人数としてはギリシャに入国した難民の総数は140万人で、内訳として田舎(農業難民)65万人、都市難民75万人としており¹⁶⁾ 町田梓楼が著した人数と一致している。²⁷⁾ しかし町田の説は川島(信)の報告を引用した可能性があり、都市難民の定着は明白にされていないが、アテネ及びその周辺地域、テサロニケ、ヴォロス等とされており、Eddy が著したアテ

ネ市内に流入した約 13 万人の説と、川島（信）及び町田の説である都市難民全体が 75 万人の説には不自然な大差はないと思われる。

都市難民が流入した事による産業への影響は、Eddy によるとカーペット産業に 3 万人以上の婦女子が就労しており、持ち運びに便利な大きさであった為需要が多く産業の発展に大きな役割を果たした。¹⁸⁾ 竹野伸一はトルコから避難した者達の数年間に及ぶ努力により、輸出品とした重要視され 1928 年だけでも約 80 工場にのぼったとされている。¹⁹⁾ 以上の点から Eddy と竹野が述べるカーペット産業がギリシャの産業の発展の一つの節目となっており、そのほとんどが輸出されたとしている。しかし、宮岡氏によるとカーペットは高価であり、前述の説が事実であれば今日まで残存している筈だが現実には全く残存しておらず、Eddy と竹野の説は疑わしいとしている。

戦間期のギリシャ産業で最も注目すべき事は貿易であり、中でも特に大きな発展をとげたのが造船業であった。都市難民が従事したか否かは明白にされていないが、小アジアに居住していた時からギリシャ人の多くは貿易に従事していた事から、肯定できる可能性はある。避難前まで貿易業を営んでいたギリシャ人が多かった為、ギリシャ本土と小アジアのギリシャ人との間に言語や文化に大差が無かったと考えられる。その為住民交換後の母国での新生活に馴染むまでに無理はなかったとされているが、宮岡氏によるとギリシャ政府の対策として難民への職業斡旋が行われた事は明確ではなく、むしろ何であれ生活の為に選択する事なく仕事を希求していた。

2 農業難民

Eddy によると農業難民が母国に定住するのに、第 I 期を 1924 年まで、第 II 期を 1927 年まで、第 III 期を 1930 年までとしている。²⁰⁾ 第 I 期には 23,000 世帯であったが²¹⁾ 第 II 期までには 143,012 世帯²²⁾ に達した。家屋の提供にも小家族向けや大家族向けと言う様に部屋の数をあわせた。

竹野によると牧畜に適した気候の為、農業難民により羊毛産業が発達した。²³⁾ その羊毛により都市難民のカーペット産業が普及した事になる。しかし、竹野は牧畜による羊毛のみに言及しており、当然の結果として考えられるラムや乳製品等食料品については全く言及していない。

また、竹野によると、養蚕産業が難民の帰国により急激に発展したと記しているが²⁴⁾ これは他の文献では扱われていない。農業難民により品質が改良さ

れたという。

一般にギリシャの農業では、タバコやオリーブ油が主であり特にオリーブは大理石の土地に適しており、嫁資として準備される事も多く、50本がその目安となっている。また、綿の生産も羊毛同様に工業の発展に関連している。

少雨の為夏野菜には適さないのが、野菜についての報告は見られない。高温の為果実の栽培には適している。

この様に、牧畜やそれに係わる肉類や乳製品、またタバコ産業、オリーブ油及び果実の栽培は、一般に手先が器用なギリシャ人特にその中でも難民の定着により一層の農産業の発展へと向かった。

宮岡氏によると難民が帰国した際に、政府が大地主から土地を買い上げ、それを小分けして難民に農地を提供したという。

古代から継承されてきた養蜂産業については、特に言及された文献はない。ギリシャ人の養蜂家を主人公にした映画は近年上映されたが、難民とは関係がない。

3 難民研究

ここで若干参考文献について述べておく。ここでは主に Eddy を中心に、その補助的資料として「世界現状大観第 8、1931」を用いた。後者に関しては当時日本でも住民交換の史実が明白にされており、当時の新聞でこそ公表されなかったが、ギリシャ研究関係者や政府関係者（大使等）にも知られていた事が分かる。また一般的に造船と言えばギリシャと日本という感覚があり、工業関係の会社等では比較的最近までは身近な関係だった。構造的不況に突入してからは、両国は異なる経済対策を執る事になった。またソビエト連邦崩壊後に航空業界では時間がかかる所謂「南回り」という路線が撤廃された為、日本とギリシャを結ぶ直行便が廃止され、民間から見た両国との関係も疎遠になってきた。その為に住民交換の史実もほとんどのギリシャ関係の文献では扱っていない。

さて、住民交換に至る過程として黒田努氏が述べる様な²⁵⁾ 条約等で区分出来る現状ではなかった。また同氏は終始コンスタンチノーブルとイスタンブールの名称変更の関係、あるいは、スミルナとイズミールのそれを混同している。イスタンブールはローザンヌ条約の関連条約で改称されたもので、黒田氏が述べている時期はまだ改称されていなかった。イズミールについては更にその後である。

更に同氏は 1922 年にスミルナ等で発生したギリシャ人等大虐殺事件による難民と、1923 年ローザンヌ条約により規定された難民とは区別するべきであると述べているが、実際には日常の中で条約の有無に係わる事無く虐殺が行われていた。²⁶⁾ 従って当時のバルカン＝小アジア問題を研究する姿勢として、柔軟さが求められる。²⁷⁾

同時に 1922 年 12 月 1 日にローザンヌ平和会議で住民交換に関する小委員会が発足したとあるが、同年 10 月には既に発足していた。²⁸⁾ 該当議事録の内 1922 年 11 月 22 日だけを見ても、12 月 1 日に発足したというのは誤りである事が分かる。当該議事録(抄)は拙論「戦間期におけるギリシャとトルコとの住民交換について、2004」の中で、ヴェニゼロスの演説に着眼し「付録その①」としてフランス語を翻訳し添付している。

また、ポンドス難民が日常語としていたギリシャ語が維持されたとあるが²⁹⁾ ポンドス地域では地理上の理由から古代ギリシャ語が温存されていたので、宮岡氏によると帰国後にエーゲ海側難民とは事情が異なっていたとの指摘がある。

(6) 体験談とその批評

(体験談：原文現代ギリシャ語、翻訳・批評：筆者、以下同様)

1 「スミルナ市からの避難体験」³⁰⁾ Η ΑΙΧΜΑΛΩΣΙΑ ΕΧΘΛΟΣ ΑΠΟ ΤΗ ΣΜΥΡΝΗ, pp. 55-58

スミルナ市のジミトリウ通りに居住していた時だった。アルメニキ地区で火事が発生した。アルメニア人達は逃亡しないように教会堂に閉じ込められた。そこにトルコ人が放火した。それは単に我々に見せしめを示す為だった。私の家の向かいは肉屋だったが、昼頃になり彼は何か歌を口ずさみながら、虐殺現場へと歩いていた。母はパツァ(スープ)を煮ていたが、他の人に与えようとはしなかった。

叫び声すら上げられなかった。火がもう直ぐ傍に迫っていた。始めのうちはアルメニア人地区だけだと安易に考えていた。何人かのギリシャ人が衣類を家具から持ち出して、荷造りをしていた。そうしている間に、周囲の様子が少しずつ変化していった。トランクに衣類を詰めた頃、火事は既に傍に迫っていた。私は家の外に出た。どんな物でも持ち物を持ち寄せあった。私の母は動揺して皿を落として割った。

私も動揺して、家から家へと渡り歩いた。母の傍を火達磨になったアルメニア人らしき人が走り去った。誰かが友達の家の様子を見に行ったが、それが母かどうか明確には確認出来なかった。長男が直ぐにカテクナス通りに走って行った。その場所にも火事が広がっていた。そのあたりの人々は家から出て、火事を恐れて大量の衣類を外に出したまま逃げだした。

ベラ ヴィスタに向けて夢中で走った。火事は迫ってきた。繁華街の方へ走った。遠くに大勢の人々が避難しているのが見えた。

トルコ人による虐殺は絶え間なく行われ、強制的に学校があるケペツォグル地区へと連行された。彼等は追い詰めて来て、指輪が何かを見ては、その指を切斷してまでも指輪を略奪した。学校に行く途中のケペツォグル地区で彼等は少女達を強姦した。それでも「非常口」を探し、お金をかき集め事件の最中に逃避を試みた。子供達はこうして家族と分散した。それから15ヶ所の地区毎にまると、指示されてそこを去った。

兵士達は大通りに出て熟した葡萄の実を素早く見つけ出しては、もぎ取って売却し、また自分達の食糧にしていた。学校は大変大きな建物で、学級毎に教室が分かれていた。

私は兵士の制止を阻止して走り出した。捕虜にされた者の小切手やピアノが略奪された。誰も眠りにつく頃まで、掛け布団に潜り身を隠した。

私の姉妹には息子が2人いて、その内1人はまだほんの幼児だった。

市場では婦人服が制限され、品薄だった。天気は良かった。太陽は赤子の泣き声の様に照り付けていた。

兵士達は隅々まで物色していた。命令されたのだろうか、降参はしないし、殺戮もなかった。そうして、スミルナ市は陥落した。私が1人の兵士に食べ物を差し出すと、別の兵士に渡された。そして、次の兵士に渡された。

女性達は兵士達の後に続き、子供達を解放する様に求め、その場に立ちすがる。私の15歳の息子は背が低かったので、ズボンを脱ぎ捨てベルトに伝って扉を乗り越え救われた。

港に船が通りがかり、夕方まで海上で停泊していた。一步一步、重い荷物を港に運んだ。信じ難い思いだった。衣類の束と一緒に商品も詰め込んだが、それだけで精一杯だった。船が岸壁に接岸すると衣類の束が裂けた。

もう一人の私の姉妹は、2人の男児とまだ赤子の娘を連れていた。近所に住む少女は強姦され、赤子は投げ捨てられた。男児は女装していた。少女は老女の介護をした。空は明るかった。太陽は照り付けていた。赤子は泣き叫んで

いた。私も姉妹も叫んだ。「何も出来ない。これでは海に赤子が投げ捨てられるわ」私の母（62歳）も叫んだ。「赤子を投げ捨てるなんて」その時は神の加護のもとで、2人とも子供を投げ捨てられる恐怖の中ではありながら、疲れ果てて眠り込んだ。

エルピゾフォロに到着した時、水を浴びせられ、船員がお湯を配ってくれたので、冷まして飲んだ。船は陸に接岸した。それからムチリニに着くと時計を見た。その地では受け入れられなかった。空は明るかった。再び出航した。次の停泊地は大きな島ではなかったが、まるでドミノ・ゲームの様に、次々に助けの手が差し出された。

今しがた、船を降りて港を離れた時、初めて泣いた。「こんな小さな島で、これから何が出来るだろう！」荷車に座り込み、小さな店を出した。たった今、悲しみに打ちひしがれ、それでも客をもてなした。空は僅かに暗くなり、船はアテネに向けてパロスから出航した。

批評；報告者は彼女の母親と子供達については述べているが、父親と夫については述べていない。当然の憶測として兵役が考えられる。当初アルメニア人だけが虐殺の対象と感じていた事から、標的がトルコ人以外の全ての少数民族に及んでいた事に気付くまで幾分時間がかかった。アルメニア人は異端とされるキリスト教の一派を信奉しており、ギリシャ正教とは異なる。本稿では省略しているが、トルコ人によるアルメニア人に対する虐殺行為は、ギリシャ人に対するそれよりは規模が大きかった事が、共産党により暴露されている。³¹⁾

最終的に報告者一行はアテネに向かうが、そこでの混乱は前述の川島（信）大使等が目撃した通りであろう。³²⁾ 定着した所がアテネか否かは不明だが、商品をも持ち出した事から都市難民である事がわかる。

2 「1922年その黒い本」³³⁾ 1922 Η Μαύρη Βίβλος, 1922

①『追憶』、p.9 ソフィア・ニコラウの巻頭言

私はソフィア・ニコラウで、小アジアのイヴリンディの出身。イキウン＝イキルケスの水車小屋で夫と8歳のマノーラキと一緒にいた時、事件に遭遇した。クサタニカではトルコ人達が村にやって来るのを目撃した。その内の一人は私達を水車小屋から外へ放り出した。そして、彼等は入口を取り囲み、皆ブラカードを掲げ、メディアの力のもとで奇声をあげ別のトルコ人は夫や子供と口論

していた。

批評；ソフィアが事件に遭遇したのは20歳代後半と推察出来るが巻頭言に挙げられる割には詳細な記憶が無い。文盲に近い可能性もある。あるいは後で困る（虐殺等）と考えたのかもしれない。その点、前述の「Η ΑΙΧΜΑΛΩΣΙΑ ΕΞΟΔΟΣ ΑΠΟ ΤΗ ΣΜΥΡΝΗ」は詳細な記憶が混乱の中にありながら理路整然と述べられている。

②『スミルナ市での報告』、p. 104

外務省御中、アテネ市

1922年5月20日、スミルナ市にて

13751 6251 国防長官が救助状況を発表；

あるギリシャ人の老人は終日放浪していた。その付近ではエフェソスから船が出港しサモス島に接岸した事が証言されている。

それはおろか、老兵も到着しアリ・ツァウス陸軍軍曹の下に、200人の特殊部隊と警察官が配置された。今年のペンテコステ（五旬祭）まで維持出来るかとアク・キリオトスやその付近の地区長老は懸念している。

8年間、住民の人口は増加せず、国勢調査では恐らくムグラでも同様とみられ、同行した者が途中で（拉致等で）行方不明になる事も考え得る。婦女子は強姦の恐怖から、家にはいなかった。食糧は底をつき飢餓から辛うじて逃れられる程だった。女性は強姦され、子供達は恐怖の中にあった。キリスト教徒の女性に対しても、猥褻行為は絶えなかった。警察官の目前ですら強要された。略奪された村は住居を移す以外に方法がなかった。400人の証言によると、冒頭の老人は自らの知恵で救助されるのを試みた。

サモス島には、同様の事情で困っていた老人が住む私設相談所があった。あの老人は親族に救出されたが、トルコ人はその親族を処罰した。

小アジア参事長官 K. パリス

批評；報告日が5月20日と記されている事から、ペンテコステより50日前のイースター（復活祭）との間の出来事と推察出来るが、8月下旬の大虐殺事件以前にも、既に老人や女性等社会的弱者に対して、トルコ人による基本的人権を無視した行為を日常的に行っていた事が証言されている。前述の「Η ΑΙΧΜΑΛΩΣΙΑ ΕΞΟΔΟΣ ΑΠΟ ΤΗ ΣΜΥΡΝΗ」の中にも、日時は記載されて

いないが、強制猥褻行為があった事が記載されている点では共通している。老人に対する行為は明らかに記述されていないが、前述の報告者の母親が62歳であった事から、ここでの老人はそれ以上に年長の衰弱した状態であったと言えるだろう。これらの行為が「1 スミルナからの避難体験」の報告では突発的な発生と推察されるが、ここではK. パリスは長期間の日常行為と示唆している。

③『サモス島での報告』、p. 162

虐殺行為対策委員会御中

外務省、アテネ

サモス島より 1922年12月2日付け

アイデニウ、ナグリ及びダノクリとは、ケザリアスからの連絡が困難だった。アクセレとイコニウはギリシャ軍撤退以来、逮捕されるまでの間の絶望的な状況は、説明しきれない程残酷だった。更に、これに続くコーカサス地方の軍隊を率いていく中で、村民達が殺されその逃げ道を探すのは極めて困難だった。しかも、安全なアンカラ市内は急に年齢制限が実施され、小アジア在住のキリスト教徒には全滅の危機が迫り、緊急の仲介が要望された。そして国際赤十字社の救助では、今でも私が救出された時と同じ程度の人数の生存者が救出されている。更に早期に配備された船で出国に向けて港に集合した。片や、内部の権力下で拷問死した者もいた。

民事裁判所 B. カヴァティアス

批評；報告日より判明する事は、ローザンヌ平和会議が進行していた最中にも残酷行為が続いていた事が証言されている。ケマル・パシヤ軍だけが突然スミルナ市において戦争行為をした訳ではなく、その前後にも少数民族への虐殺行為が行われていた事が判明し、ケマル・パシヤに関する多くの文献では彼を英雄視させる為か、1922年8月下旬の大虐殺事件の前後には、その前兆といいその後といい、虐殺は皆無であったかの如く記されている。しかし、事実は彼だけが特別な英雄的行為をした訳では無い事がわかる。

(7) オーラル・ヒストリー³⁴⁾

両親が都市難民だったというギリシャ人女性に、オーラル・ヒストリーを試みた。2回に亘り、両親から絶えず聞かされた体験談をインタビュー方式で行

ったので報告する。

日時：1回目 2003年4月21日（月）午前11時～午後4時

2回目 2003年7月24日（木）午前11時～午後3時30分

場所：東京都渋谷区 ギリシャ人宅

1 ヴェニゼロス政権について

近現代ギリシャを代表する最も有力な政治家と言える。彼は2度に亘るバルカン戦争を起こし、また第1次世界大戦では連合軍側に付いて勝利し、セープル条約により小アジアの大部分を獲得した。しかし、事実上の問題として、連続して派兵される兵士達は疲労困憊状態だった。そういう不利な時に、オスマン＝トルコ帝国の兵士を率いるケマル・パシャが僅か10日間程度で、ギリシャ軍を敗北させ、ギリシャ人を始めとする少数民族への大虐殺事件へと展開した。

ヴェニゼロスは1922年にローザンヌに赴き、ローザンヌ平和会議でケマル・パシャ等オスマン＝トルコ帝国側と議論した。ヴェニゼロスはオスマン＝トルコ帝国と住民の交換を行う事で合意したが、追い立てられる様にギリシャ本土へ移動したほとんどの者は、家財を小アジアに残したままだった。プリカと呼ばれる娘の嫁資も残してしまった。その返還はなされなかった。残留財産に関する協定が行われている為、トルコ側が一方的に残留財産を返還しなかったと解される彼女の発言と、返還を促す協定の間に矛盾がある。

また、農業難民に対するヴェニゼロスの対策は政府が大地主から土地を買い上げ、それらを小分けして難民に与えた。

元来、ヴェニゼロスがオスマン＝トルコ帝国に派兵したのは、良質な石油を産出するモスル油田を征服したかった為もあり、イギリスと協同して派兵したが失敗し、多数の難民が発生したのは政策上のミスであった。この「モスル油田」に関し別の機会に訪問した際に話していた地名と矛盾する。以前は、黒海沿岸の都市からタンカーで輸出したと言っていたが、今回は現イラク領のモスル油田と言っていた。

当時、ギリシャ政府は大きく2派に分かれていた。フランス側についていたヴェニゼロス派とドイツ側についていた王制派である。両者は対立しあい、前者は親仏国から支援を受けていたが、政策上の賭け事を好み外交を得意とする点があった反面失脚し、1922年の大虐殺事件後に亡命した。

2 定住先での異文化接触について

難民の定住地では、ネイティヴと難民との摩擦は発生しなかった。同じギリシャ人という民族意識から、むしろ強い団結意識があった。テサロニケの場合、学校ではネイティヴよりも難民の方が生徒数のうえで多かったので軋轢はなかった。言語の点でも本土と小アジアのスミルナ周辺とでは、ほとんど差がなかった。しかし、子供の結婚問題となると、内心では反発もみられたようだ。

ただ、ポンドス難民の場合は、事情が異なっていた。彼等は古代から黒海沿岸に居住していて、背部に険しい山脈があり他民族とほとんど接触が無かった為、言語は古代ギリシャ語を使用していた。例えば、母音が並列する場合、「OU」は「オウ」と発音する様に古代ギリシャ語読みする。一方、本土やスミルナ周辺で用いられる現代ギリシャ語では「OU」を「ウ」と発音する。即ち日本に当てはめてみれば奈良時代の言葉を温存していた様なものである。また、彼等は独自の文化があり、特に踊りが国際的に知られている。それについての研究は多く存在する。

3 Η ΕΞΟΔΟΣ について

政府による個別調査の結果の公表に対する、プライバシーを理由とした反対はなかった。むしろ、公表を希望する意見のほうが多かった。日本では「恥」について否定的で集団への帰属を重要視するが、ギリシャ人は集団より個人を重視し、所謂一匹狼を良い事とみなす。だが、家族や民族内での絆の強さは相反した側面を有している。

4 難民政策について

当初の政府の反応は成功だった、と言うが、ヴェニゼロスは当初住民交換には反対していた。結果として条約に調印し住民交換に至ったので、誤解を招く恐れがある。

都市難民と農業難民とに分け、夫々の能力や適性にに応じて職を与えた。これに付いて第1回目のインタビューで語っていた「都市難民は定職を持つ事も無く、目前の仕事は何でも行った」という発言と矛盾している。

(8) 結論

難民の定義については、黒田氏は1922年大虐殺事件により発生した難民と、1923年ローザンヌ条約により発生したそれとは区別するべきであると主張しているが、根拠は明らかではない。1921年にアーノルド・トインビーが調査のために訪問した際には既に難民が発生していた。黒田氏はその点を考慮に入れていない。また宮岡氏は難民の交換の際、小アジアでの残留を強く希望する為にギリシャ人でありながら故意にムスリムであると偽って主張した場合もあったという。以上の点から筆者としてはこの時期に発生した難民を明確に区別するべきではないと思う。難民発生理由はケマル・パシャの純粋主義の故であり、全ての少数民族が虐殺の対象となっていた。犠牲者はギリシャ人よりアルメニア人の方が多かった可能性も有り得る。というのも後者の方が前者よりも早い時期に虐殺されていたからだ。後者の犠牲者の頭蓋骨を山盛りに積み上げた数葉の写真がそれを物語っている。黒田氏はギリシャ人以外の少数民族については述べていない。難民の定義をするには幅広い調査と研究が必要である。更に困難な事は、当時のドキュメンタリーを求めているのならば、事前にカサレヴサを習得しておく事も必要である。

さて、問題提起の第1は、この問題は国際問題へと発展し、トルーマン・ドクトリン、マーシャル・プラン、そしてNATOとして今日も存在している。また、戦時中には対立するドイツ軍が居留していたが、ギリシャ王室はドイツと密接な関係があり、それが戦後も内戦状態が続く原因のひとつとなっていた。カラマンリスが亡命先から帰国し文民政権を樹立したその背景には、アメリカ軍の駐留があり内戦は終了したがかえって反米運動へと発展した。経済状況には都市難民にも大いに関係したと考え得る。造船業や観光事業が歳入に大きく関与した時期もあったが、今日ではEUの一員としてメトロポリタンを目指している。

住民交換は今日では結果として成功であったと宮岡氏が主張している様に、経済の発展や社会の安定に大きく関与して来た。ただ、その背後あった小アジアでの少数民族に対する数百万人の犠牲が存在していた事も忘れてはならない。また、日本も含む諸外国による石油の確保がその根底にあった事も、外務省外交史料館で保存・公開されている膨大な史料の中の一部を見るだけでも推察出来る。ギリシャとトルコとの問題は戦間期だけでなく、その後の両国との関係、及び国際政治の上で現在も凝視されている。

問題提起の第2の点について、都市難民の定住状況であるが、まず都市難民と農業難民との職業の上での関係について見ておく。農業難民はギリシャ本土で主に良質の羊毛や綿花を産出していた。それを都市難民が手ごろな大きさの輸出用のカーペットに加工した。こうした事から農業難民と都市難民の間に流通経路が確保された事が考え得る。しかし宮岡氏はカーペットの生産すらなかったと強く否定している。宮岡氏はテサロニケ出身である為、アテネ市内での事情と同様に考えるのは幾分無理があると思われる。

都市難民の内、アテネ市郊外のネア・スミルニ地区を定住先とした難民の例として、地区の「創立60周年記念誌」によると、ネイティヴとの軋轢は多少の差はあれ、ほとんど無かったと思われる。この点は宮岡氏も同様に述べている。地区の最大の試練は第2次世界大戦前後の共産党々員の温床の場となっていた事だった。様々な分派が居住し地区の人口構成のうえて年毎に増加していくのは党員の居住と関与するか否かについては明白にされていない。しかし、当然の事として否定出来ない。

オーラル・ヒストリーの試みとしては、文献だけで把握出来ない生の感性も感情移入された。日本人とトルコ人は同じモンゴロイドである故にトルコに有利な書籍が多く翻訳されている。ギリシャ人は長い歴史の中で奔放にされて来た。その為民族の血統としてはアーリア系やアラブ系等様々な容貌をし、混血として存在している。それは今日取り扱った住民交換の結果だけではなく、古典時代を過ぎてからも多くの試練を受けながら存続してきた民族自決意識が、ギリシャの歴史を維持してきたと言える。

註；

1) (2)を記述するに当たり、以下の文献を参考にした。①R. Clogg: A Concise History of Greece, Cambridge Univ. Press, Cambridge, 1997(1992) ②C. M. Woodhouse: Modern Greece—A Short History —, Faber and Faber, London, 1991(1968) 双方とも近現代ギリシャ史と対象としている点では共通しているが、①はごく一部の富裕な難民を対象にしているので、難民全体の事情を知る上では信頼性に欠けるという批判がある。その的とされているのは、例えば当時の西欧諸国で流行していた華麗な衣装を着た新郎新婦並びにその親族を撮影した集合写真を史料として用いている点で、結婚式を挙げること自体が不可能に近いのが実情であった。②は一般教養書としては優れているが、「Modern」という時代区分を西暦324年から始めており、その理由としてはキリスト教会

の歴史を中心に時代区分がなされている。また、①は写真を多用しそれに半頁以上の解説を付加する事で、より現実性を持たせているが、②は視点を限定せず世界情勢の中でのギリシャの立場をとらえている。

2) National Research Foundation: ΕΛΕΥΘΕΡΙΟΣ ΒΕΝΙΖΕΛΟΣ, Historical Album, Chania, 2003, pp.8-24

3) 難民の人数は明白にされておらず、前掲書2)の中でも p.24 では150万人としながらも、同頁の別の行では100万人とされている。

4) 60 Χρόνια Νέας Σμύρνης 1929-1989, p.114

5) H.S. トルーマン著、堀江芳孝訳：トルーマン回顧録、恒文社、1992、pp.78-90

6) 前掲書5)、pp.91-100

7) 佐瀬昌雄：NATO 21世紀からの世界戦略、文芸春秋、2003、pp.30-31

8) 前掲書7)、p.149

9) B.Clinton: my Life, Faber and Faber, NY, 2004, p.876

10) R.Clogg: A Concise History of Greece, 1991(1968), p.84

11) 前掲書10)、p.112

12) ドイツでのガスタルバイターの受け入れは、東西ドイツが統合して以来急激に減少した。旧東ドイツの国民に職業を与える政策の為。

13) C.B.Eddy: Greece and the Greek Refugees, George Allen and Unwin Ltd., London, 1931, 序文

14) M.Houspiar: Smyrna 1922: The Destruction of a City, Faber and Faber, NY, 1972, p.213

15) 前掲書13) p.116

16) 川島信太郎：希臘事情、啓明会講演集32回、1929、p.30

17) 町田梓楼：欧州文化の発祥地希臘；世界現状大観第8、新潮社、1931、p.264

18) 前掲書13)、p.126

19) 竹野伸一：希臘の産業と貿易；世界現状大観第8、新潮社、1931、p.277

20) 前掲書13)、p.83

21) 前掲書13)、p.92

22) 前掲書13)、p.97

23) 前掲書19)、p.277

24) 前掲書19)、p.278

- 25) 黒田努：小アジア難民の「脱出」と「住民交換」——ギリシャ・トルコ戦争（1919—1922）の最終局面と戦後処理——年報地域文化研究、1999年3月、2000
- 26) A. J. Toynbee: The Question in Greece and Turkey; A Study in the Contact of Civilizations, Constable, London, 1922
- 27) 前掲書 25)、p. 95
- 28) 前掲書 25)、p. 91
- 29) 前掲書 25)、p. 88
- 30) Τ. Δεληγιάννης : Η ΑΙΧΜΑΛΩΣΙΑ · ΕΞΟΛΟΣ ΑΠΟ ΤΗ ΣΜΥΡΝΑ, ΕΚΔΟΣΕΙΣ ΙΔΜΩΝ, Αθήνα, 2001 (1997) 、pp. 55—58
- 31) The Turkish Crime of our Century: Asia Minor Refugees Coordination Committee 、(出版地、出版年不明)
- 32) 前掲書 16)、p. 30
- 33) Τ. Π. Καυρήs : 1922 Η Μαύρη Βίβλος, ΕΚΔΟΤΙΚΟΣ ΟΡΓΑΝΙΣΜΟΣ ΛΙΒΝΗ, Αθήνα, 1922
- 34) 御厨貴：オーラル・ヒストリー、中央公論新社、中公新書、2002